アカシア俳句会

令和六年　夏季俳句会　「句評」　　夏の季語を含む作品一～五句

一、「特選句」　選定句評

○花の名や樹の名忘るる老いの夏　　山家由紀

◆ほんまにそうです　思い出しても吃ります　お大事に！　　戸堂博之

○鏡には父ソックリの浴衣がけ　　戸堂博之

◆すごく好きな句です　私達の年齢にならないと作れない句です　お父上にもう一度お会いになりたいわね　　吉澤志保子

○念仏をまねて念仏青蛙　　戸堂博之

◆奥の深い句ですね　青蛙も米寿を迎えお念仏の道を伝えた七高僧の教えを聴聞し　往相・還相回向を味わっています　　前田秀一

○くちなしの白なほ白く家裁前　　加龍恵子

◆黒白を争う家裁の建物の前で咲いているくちなしの白さを鮮やかに表現されているのが素晴らしいと思いました　　中野亘子

○全壊の家にも花咲く立葵　　佐藤茂弘

◆片付けも出来ずそのままの被災地のそばで　真っすぐにどこまでも花をつける立葵を見て一層心が痛みます　　加龍恵子

○どくだみの白を誇りて庭に満つ　　中野亘子

◆白く可憐な花にこの名は匂いのせい？　それをはねのけ　庭に咲き満ちる姿に共感　見習いたいものです　　山家由紀

○朝堀りの筍白い尻並べ　　前田秀一

◆新鮮な朝堀のみずみずしい筍を店先に並べてある様子をユーモラスに表現したほのぼのとした情景を表しています　　都　福仁

二、「編集後記」

「土生重次師俳句論」（＊＊）

＊＊：小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき―』（復刻）扉会運営委員会

《今回の学び》

「俳句は映像（イメージ）の交換である」　　百四頁

日頃見慣れたものが、少し角度を変えて捉えられると、初めて見たような新鮮さを与えてくれる。それがものや事柄との出会いの感動である。われわれはそれを求めて俳句を作るのである。

「はじめて見たような新鮮さ」とは映像である。「絵」が浮かんできて、それに共鳴することである。大切なことはこの「ような」にある。すでに見ているのだ。気が付かなかっただけだ。「はじめて見た新鮮さ」ではない。これを理解していないと「新鮮さ」ばかりを狙って、言葉探し、観念探しに陥り「絵」がともなわない。

入門書でもよく言われているが、「俳句は名詞で勝負。一句一動詞。形容詞に頼るな。」が基本である。それが形象する作句力につながる。「形象」とは「かたち。すがた」であり、美学では「対象を観照（創造）して心の中に浮かび上がる、その対象のすがた」と辞書にある。

私は「俳句は映像（イメージ）の交換である」と言っている。この作者の形象が、読者の形象として享受できる作品は強い。特異な事柄を持ち込んだり、観念的な言葉を羅列しても、継承するものが生まれてこない。俳句を作る人は、まず自分の眼を信じることである。それがないとつい他人の眼を借りてきて、一般に通用することを第一に考えてしまう。そこに感動はない。

汽車の窓拭きて一人の雪景色　　村井栄子

汽車の窓をそっと拭いた。向こうは雪である。雪景色は単調だ。だが自分だけに広がっていく世界である。「一人の雪景色」によって、作者だけの空間と時間に招じ入れられたような気になる。

俳句はまず作者の捉えたイメージを読者に再現してくれる。そして、想いを再現させてくれるのである。俳句にはこの両面のあることを知ってほしい。

《これまでの学び》

既発行『句評』「編集後記」掲載

◇「俳句は叙事詩である」　季語―非凡の一節を支えるもの　令和五年『冬季・新年俳句会』

◇「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」　令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は〝心〟や〝情〟を直接的に詠ってはならない」　令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は〝今〟をとらえた文芸である」　令和五年『春季俳句会』

◇「俳句は〝何を詠うか〟ではなく、〝いかに詠うか〟だ」　令和五年『春季俳句会』

◇「俳句は感動を詠う詩である」　令和五年『夏季俳句会』

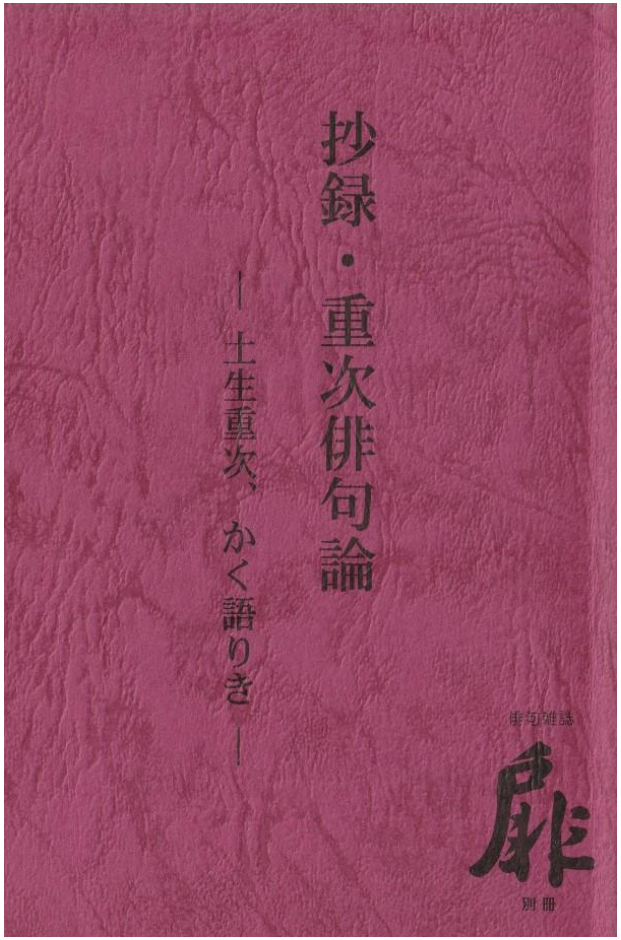
◇「俳句は自然と人間との関わりを詠う詩である」　令和五年『夏季俳句会』

◇「俳句は『坐五』（＊）がいのち」＊：「坐五」下（しも）五文字　令和五年『秋季俳句会』

◇「俳句は描写ですよ！」　令和六年『冬季・新年俳句会』

◇「言葉はやさしく、思いは深く」　令和六年『春季俳句会』

◇「俳句は映像（イメージ）の交換です」　令和六年『夏季俳句会』



編集人　前田秀一